

ふくしまイレブンとは、福島県の多彩な農林水産物を代表する生産量が全国上位の11品目です。毎月おいしいアスリートを紹介します。

ふくしまイレブン



**バックナンバーが読める！
HPはこちら!!!**

聖夜なる神話

ふくしまイレブン 背番号1番 福島牛

キーパーつてのは、守護神とか呼ばれたりするわけだが、神でもなんでもない。相手のシュートを止めて当たり前、点をとられた時には遠慮なくヤジが飛ぶ。試合の間、俺の名前を呼ぶ奴がいるか？ボールの行方も追わずに、俺がゴールで構えてる姿を見つめてる奴がいるか？答えは簡単、NOだ。
俺は強い。いつも一人で闘う準備がある。心が強い奴じゃなけりや、キーパーなんてのは務まらない。

だから、と言うわけじゃないが、買い出しは一人で十分だと他のメンバーを振り切って一人で俺は街に出ている。

サッカー部のクリスマスパーティーは毎年恒例だが、ビンゴの企画は今年がはじめてだった。みんなでビンゴの景品を買いに行く予定だったが、当日になってアレがないコレがないと言いついたら、ビンゴの景品の買い出しどころじゃなくなっちゃまった。どうする、ビンゴはまた来年にするか、なんて意見が出始めたもんだから、俺はそれを制して一人で買い出しに行くことにした。俺は、ビンゴをものすごく楽しみにしてたんだ。

小一時間の買い物をした。犬がコインを食べる貯金箱とか、水着の絵が描いてあるTシャツとか、そんなものを両手一杯抱えて、俺は満足いっぱいだった。これはウケる！という確信に満ちた景品ばかりだ。この短時間で、これだけ凝った景品を買い集められる俺は、やはりすごい。

「すんげえいっぱい持ってるな。」
横断歩道で信号待ちをしていた俺に向かって、隣の爺さんが話しかけてきた。

「ビンゴの景品なんす。十個も気の利いた物を選ぶの、苦労したツスよ。」

「ほだへ。そつたら大勢でビンゴゲームして、楽しいべなあ。」
爺さんは、俺に何度も相つちを打ちながらニコニコしている。ふと見ると、爺さんもものすごい量の荷物を抱えていた。

「すごい荷物ツスね。」
「ああ、これ。なんちゃない、すぐそこまでたつべき。」
爺さんはニコニコしている。でも、荷物のサイズと肩への食い込み方からすると、相当な重さだとわかる。すぐそこだつて言うたつて、こんな荷物抱えて横断歩道を渡りきれるところはどういう思えない。

「俺、持ちますよ。」
車道の信号が黄色に変わる。
「…じゃあ、おこぼに甘えていいかい。」
車道の信号が赤に変わった。爺さんの手から軽々しく、ずつしりと重い袋が俺に預けられた。重い。想像していたよりもずつとずつと、重い。袋を持つ手が鬱血して、紫色に変わっていくのがわかる。

歩行者用の信号が青に変わり、爺さんは、ひよこひよこ前を歩いて行く。俺は、両手に抱えた荷物と預けられた袋の重みに、ただもだえていた。だめだ、とても運べない。
「だから言ったべ。」

爺さんがそう言いながら、振り返ろうとしたその瞬間だった。一台の車が、爺さんが立ち止まっている交差点に入ってきたのだ。車にひかれる！と、瞬時にそう思った。

俺は無我夢中で爺さんに飛びついた。本能だった。両手にもものすごい重量の荷物を抱えていたのに、そんなことを忘れて、必死に飛びついた。

一瞬の出来事の中で、俺は道路に転がって倒れていた。気づくと、目の前には爺さんがニコニコ立っていた。

「たまたげたべな、悪がったない。」

爺さんはそう言うと、自分の袋をひよいと持ち上げて、今飛び込んできた車に乗り込んだ。いや、車じゃない。そりだ。そりの先にはトナカイがつかれている。俺は何が起こつたかわからないまま、その場に座り込んでいた。

「おめえの景品がねえべ。」
そう言うと、爺さんは俺に向かって小さな箱を投げた。
「なくすんでねえよ。」

俺に向かってにやりとほほえむと、爺さんを乗せたそりはすい勢いで空に舞い上がり、そして、消えた。
俺は、呆然としながらゆっくり箱のふたを開けた。中に入っていた小さな紙切れには、「信頼」と汚い字で書かれていた。

美しく豊かな自然の中で、生産者の愛情をいっぱいを受けて育った福島牛は、鮮やかな色合いと良質の霜降りをもつ絶品の牛肉です。柔らかな肉質、風味豊かでまろやかな美味しさをぜひ一度ご堪能ください。

福島牛

